

リテラシー・アワーを推進するイングランド

国語教育講座・教授
松川 利広



■心地よいカルチャーショック

私は、二〇〇一年十月一日から二〇〇二年七月三十日まで、文部科学省在外研究員として、ロンドンに滞在する機会に恵まれました。目的は、イングランドにおけるナショナル・カリキュラム（英語科）の実施状況を実践面（主に小学校）から検証しようというものでありました。

長期にわたる海外生活は初めてのこともあり、心地よいカルチャーショックの連続で、心の発動を自覚的に体感することができました。それは、彼の地で満五十歳の誕生日を迎えた私にとって、来し方を振り返り、往く方を見定めるうえでも、すばらしいプレゼントとなりました。以下、研究対象であった、リテラシー・アワーについて簡単に触れておきたいと思っています。

■読み書きを重視した英語科教育

イギリス（略称UK）は、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドからなり、教育



ロンドン市内の小学校（二年生）



トという場合、イングランドのことを指します。そのイングランドでは、リテラシー（読み書きの基礎能力）の向上を図るための教育政策が推進され、その授業（リテラシー・アワーと呼ばれている）のあり方が研究されています。

リテラシー・アワーは、ナショナル・カリキュラムをベースにして作成された、具体的な学習目標に準拠して展開されます。教師は、その目標を個々の児童が達成できるように、学習材や学習課題を習熟度別に用意します。学習材の選定（日本のような教科書制度はありません）や学習課題の設定、学習方法の工夫等において、教師の力量が問われることとなります。そしてこのリテラシー・アワーの評価は、ナショナル・テストの成績（公開）や査察官による授業評価などによって行われます。このようにリテラシー・アワーの推進を通して、教師の資質向上が、量と質の両面から図られているのです。

■交流のはじまり

本学の協定校であるアメリカ合衆国ペンシルベニア州、ロック・ハイブンを訪問するのは今回で十数回目になります。一九八七年文部省科学研究費補助金を得て、「生涯スポーツの促進に関する日米比較研究」を行ったのがきっかけで交流が始まりました。

ロック・ハイブンは教員養成を主目的とする、学生数が約三千名の小さな大学です。大学のすぐ横にはSusquehanna Riverが流れ、自然環境に恵まれた大変美しい大学です。

■インターネット授業の試み

平成十二年度の学長裁量経費「海外研修の可能性の検討―アスレティック・トレーナー養成プログラムへの参加―」というプロジェクトで、学生の短期留学研修の可能性を検討しました。

しかし、費用や語学の問題があり、実現困難である

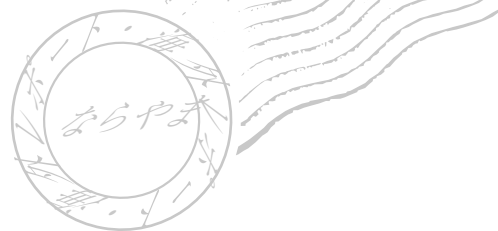
海外とのインターネット授業の試み ―平成14年度学長裁量経費プロジェクト―

保健体育講座・教授
中谷 昭



英国における生涯教育の視察を終えて

英語教育講座・助教授
吉村 雅仁



■英国を視察

視察するには季節はすれとも言える二〇〇二年十一月末から十二月初めにかけて、英国を訪れました。目的は、本学の生涯学習・地域連携委員会活動の一環として、英国における生涯教育（学習）の事例を視察することでした。

日高佳紀委員長、総務課研究協力係の二井信吾係長とともに、ロンドン、ヨーク、エジンバラを中心に四大学を訪問し、そのうち、開放大学（オープン・ユニバーシティ）、ロンドン大学、エジンバラ大学では、直接担当者から話をうかがうことができました。

■実践への参考

当然のことながら、国の違い、大学の規模の違いがあるため、例えば、



ロンドン大学教育学研究所のアン・ホジソン教授（中央）と（右は日高佳紀助教授）

また、教育方法としては現在英国内外に一八万人もの在籍者を持つ開放大学のような、遠隔教育と対面教育との融合方式が注目に値します。

ビデオ、CD、インターネット等を利用した教材を提供すると同時に、地域センターや学習センターなどの個人指導の場を設けるといふ形で、その際、充実した教材作成とチューター養成が大学の主な役割となります。

そして、さらに重要な点は、今回視察した全ての大学で見られたように、専任スタッフと専用の施設が最低限必要であろうということ。生涯教育は、専門家抜きの集団が副業的に行うにはあまりにも荷が重いものであると言えます。

■専門家を要する生涯教育を実感

彼らの生涯教育を、本学の教育に安易に適用することなどできません。とはいえ、生涯教育に取り組む際に参考となる情報がいくつか得られたように思われます。

まず、ロンドン大学教育学研究所生涯教育学科のホジソン教授に指摘されたことですが、生涯教育実践に先立つ「市場調査」の実施と、その結果を踏まえた実行可能なカリキュラム作成の必要性を挙げることができます。

例えば、生涯教育として、教員の継続教育という目標を設定するのであれば、現職教員側が何を求めているかを調査し、それに基づいたテーマを設定、大学の現有スタッフ（非常勤も含め）でそのテーマに関して何ができるかを検討、そしてカリキュラム作成という手順を踏むことになろうかと思われま

ことから、インターネットを利用した、ロックハイブ大学への授業参加の可能性を検討することになりました。特に今回はコンピュータに関する作業が多いことから、教育実践総合センター長の藤原教授にもプロジェクトのメンバーになって頂きました。

写真はロック



ロックハイブ大学から本学へのインターネットミーティングの様子

■これからの交流

ロックハイブ大学国際教育学部では新たに日本への学生の派遣に関するプログラムが計画されています。最近、ロックハイブ大学へ留学する学生がいなくなりましたが、これを機会に再び多くの学生が交換留学生としてロックハイブを訪れることを心より願っています。